



小説 山本沙姫

挿絵 てんまそ

**立ち読み版**



## 登場人物紹介

Characters



ひょうどう あゆみ

### 兵頭 歩

坂田兄妹のクラスメイト。金枝とは同じバレ一部員で親友同士。



かどわき なな か  
**角脇 七華**

坂田兄妹とは幼馴染みの先輩。新体操に所属するポニーテールの美女。



さかた かな え  
**坂田 金枝**

銀之助の双子の妹。兄と異なり人なつこく明るい性格。女子バレ一部に所属。



ひだか れいか  
**飛高麗香**

学園長の孫娘で傲慢かつ高飛車な性格。テニス部キャプテンとして横暴の限りを尽くす。



やぐるま かおり  
**矢車香**

ボーイッシュな容姿が特徴の王将学園柔道部主将。麗香の従姉妹。

かつらぎ けいこ  
**桂木桂子**

化学部の気弱な少女。常に白衣を身につけ、麗香につき従う。



さかた ぎんのすけ  
**坂田銀之助**

私立王将学園の生徒で、金枝の双子の兄。

第一局	銀金兄妹	007
第二局	高飛車合嬢	026
第三局	6・九歩、成る	049
第四局	香車猛進	088
第五局	桂馬の奇襲	118
第六局	角行一喝	142
第七局	投了	189



「それでね、お兄ちゃん、アタックが十本に一本は入るようになったのよ。すごいでしょ？」

大勢の学生たちで賑わう通学路の中に、ひときわ目立つ双子の兄妹がいる。坂田銀之助さかたぎんのすけと金枝かなえ。可憐な容姿と仲のよさ、そして妹の五月蠅さで目立つ、学園の名物兄妹だ。

兄の細い左腕にしがみつき、ガラス玉のような瞳をキラキラ輝かせながらここ数日続けてきたバレエ部の特訓で上達した腕前を語る妹のお喋りは、いつまでたっても止まらない。ふっくらとした柔らかい頬や、形は美しく整っているものの、身長が一五〇センチを超えている割にはまだまだ発展途上といった感じの伏せた茶碗のような小振りな胸を、肩や二の腕に押しつけながらまるで子供のように甘えてきている。

彼女がところかまわず兄にベタベタする姿は、今朝に限らぬ日常茶飯事の光景だ。

「ふーん」

自分を慕い、甘えてくる彼女の相手を普段はしてやる兄の銀之助だが、今日ばかりはい

つもと違う。いくら愛おしい妹の話でも、前夜から耳にタコができそうなら同じことを何度も何度も繰り返して聞かされ続けるのは、かなりきついことなのである。

「んもーっ！　ちゃんと聞いてないでしょ？」

自分の話をうわの空で聞いている兄に不満な金枝は、剥きたてのゆで卵の如く艶やかで、ふつくらとしたマシユマロのように柔らかな頬を、プーッと七輪の上で焼ける餅の如く膨らませると、掴んだ腕を引っ張るようにピョンピョンと飛び跳ねた。

細身の身体が宙に浮くたびに薄く黄金色がかつたショートカットの茶髪が振り乱れ、パラシュートのようにふわふわと捲れ上がる制服のミニスカートの中から、白く張りのあるカモシカの脚のようなピチピチの太腿が露あらわになる。

坂の下側からならば、フリルのついた可愛らしいショートツに覆われている、キュッと引き締まった青いリングのように初々しい、小振りなヒップまで見えているに違いない。

「はいはい、そりゃあー大した進歩だ、うん」

興奮して跳ね回る妹に呆れ顔でおざなりな返事をする兄銀之助は、さすが双子だけあって制服を取り替えても誰にも気づかれないのではないかと、と思えるほど妹によく似ている。

サラサラのショートヘアに華奢な身体つき、少女のような愛くるしい大きな瞳と、まったく日焼けしていない絹のような白き肌。無論、背の高さもほとんど同じぐらいだ。

とはいえ性別による違いを除けば何から何まで同じ、というわけでもない。

まず、乙女のような弱さを感じさせる顔つきにあつて、妹よりやや太めのキリッとした眉毛が目を引く。美しい髪は、女の子にしては手入れが雑で癖のある金枝とは対照的にちゃんと手入れされており、きれいに揃えられている。

体格も逞しさは感じられないものの、妹よりは若干太い腕や多少なりとも広い肩幅が、まるで「僕は男だ、兄貴なんだぞ」と、無言で主張しているかのような凛々しさを極わずかに感じさせていた。

そして際立つて違うのが外見ではなく、その性格だ。

妹の金枝はとにかく活発で積極的、そして子供っぽく周りをあまり顧みない性格だが、兄は反対に控えめ、というよりは臆病な性格として知られている。偶然にも前方への移動が広い金将と、後方の移動が広い銀将という、名前と同じ漢字のついた駒の移動範囲を性格に表しているようである。

しかし彼が、人を思いやることに長けた心優しい少年であることを知る者はほとんどいない。他人から見れば頼りない少年にしか見えないが、生まれた瞬間から同じ時を過ごし、兄の性格をよく知る金枝は優しい彼をこの世の誰よりも敬愛し、心から慕っているのだ。

「おはよう、お二人さん。今日も仲がいいわね、ちよつと羨ましいかな」



校門にさしかかった仲よし兄妹に、一人の少女が親しげに話しかけてきた。

(あっ！)

不意な言葉に、思わず息を呑む銀之助。

時折吹く夏の湿った風の中でも、秋風に吹かれる稲穂の如く軽やかに靡く亜麻色の長い髪に、羽根を休める蝶を思わせる可愛らしい黄色のリボンを結んだ、身長一四〇センチほどの小柄な体軀の少女。

少し触っただけでも折れてしまいそうな小枝の如き腕と、短いスカートからスラリと伸びた細い脚。一見虚弱そうな身体つきだが、血色のいい桃色がかった肌の色から、スポーツ好きな彼女の活発さが窺える。

金枝よりもさらに小さな胸やクリクリとよく動く大きな瞳、頬に丸みを帯びた顔立ちから幼さを感じさせる反面、どことなく威厳を感じさせるしつかりとした目つきと落ち着いた口調が、おおらかで大人びた雰囲気を出していた。

幼さと大人っぽさ、相反する二つの印象を持ち合わせたこの不思議な少女は、坂田兄妹の同級生にしてクラス委員長の兵頭歩ひょうどうあゆみである。

「おーっはよーっ！ 歩ちゃーんっ!!!」

「あっ、お、おはよう……兵頭さん……」

左手を高々と振り上げて、親友に元氣よく呼びかける妹と違い、兄は頬を朱に染めて、

少し視線をそらしながらたどたどしく声をかけることしかできない。臆病者の彼は異性、とりわけ恋焦がれている彼女に接するのが大の苦手なのであった。

胸の鼓動が天井知らずに跳ね上がり、おろおろとする銀之助にお構いなしに、金枝は彼の腕にしがみついたまま、強引に歩の元へ引っ張っていく。

「ねえねえ、歩ちゃんからお兄ちゃんに言つて。金枝がすっごく頑張ったつてことを」自分の左腕にしがみついたまま歩を右腕に押しつけてサンドイッチにするようにして、満面の笑みを浮かべながら彼女に語りかける妹の行動に焦る兄銀之助。

腕にしがみつく彼女の小さな手は、その笑顔とは裏腹に血が止まるかと思うほどぎっく握り締められ、まるでラグビーのスクラムの如く渾身の力を込めて、おどおどする彼の細い身体を真横から押ししているのだ。

「お、おい……金枝……ちよつと、離してよ」

強引な妹を止めようと、気弱な少年は必死に話しかけるが、妹は力をまったく緩めようとはしない。それどころか、二人を紙一枚入る隙間もなくくっつけるかのように、押しつける力をどんどん増し続けている。

「ほらほら、もつとくっついて、手ぐらい握っちゃえば？」

兄の思い人に気づかれぬように、金枝は耳元でそつと囁いた。彼女は、奥手な銀之助と己が親友との仲を取り持とうと、何かにつけていつもあれこれ画策してきているのだ。

(まったく、余計なことを……)

妹のお節介に手を焼きつつも、自分のことを思ってくれる彼女の優しさを嬉しく思う奥手な兄貴。だがこの時の彼は、金枝の胸の内のすべてを理解するには至っていないかった。

一方、友の胸の内を知らぬ歩には、大好きなお兄ちゃんが努力した自分を褒めてくれないことに不満を感じ、ダダをこねているように見えている。しかしそれこそが、二人の仲を近づける彼女の狙いであった。

「あらあら、愛しのお兄ちゃんはある限り褒めてくれないの？ だめよ、銀之助君。ちゃんと褒めてあげなくちゃ。金枝ちゃんは褒められるほど伸びるタイプなんだから、ねっ！」  
同じバレエ部仲間で、金枝の努力する姿を間近で見てきた歩から、論すような口調で不満を漏らす妹を褒めるように催促される銀之助。同級生でありながら、まるで年下の少年を相手にするようなお姉さんぶった態度だが、不思議と嫌な感じはしない。

むしろ彼女のこうした大人びた態度や言動が、彼を引きつける大きな魅力なのである。

「い、いや、夕べから何度も何度も、聞かされているから……つい……」

たどたどしい口調で、前日から同じ話ばかり聞かされて少々うんざり気味なことを告げる気弱な少年。しかし、思いを寄せる娘から真剣な目つきで見つめられてお願いされると、そんな不満もどこか遠くへ吹き飛んでしまう。

「ま、まあ、兵頭さんがそこまで言うなら相当努力したんだよな。えらいぞ、金枝」

そうやって彼は寄り添う妹に柔らかな視線を送り、彼女の頭を、まるで子猫のような小さい動物を扱う感じの優しい手つきで撫でた。すると自然に、彼の顔も綻んでいく。

「そうそう、もつと褒める褒める。よかったね、金枝ちゃん」

親友が敬愛する兄に褒められることを、まるで自分のことのように喜ぶ歩は、彼女に釣られるかのように銀之助の右腕にギュッとしがみつく。まだ青い果実を思わせる小さな乳房が、制服越しに彼の腕に押しつけられた。

「あっ……」

半袖のシャツから剥き出され、表面にうっすらと汗の浮いた二の腕に押しつけられる憧れの少女の微乳。

(ひ、兵頭さんの胸が……)

湿り気で密着した薄布を介して、小振りながらも真綿のように柔らかい乳房の感触や、トクトクと胸の鼓動までが伝わってきて焦る銀之助は、今にも気絶してしまいそうだ。

「うんっ！ 歩ちゃんのおかげだよ」

左腕にしがみつく金枝も、まるで競うかのように小さな乳房を押しつけてはしゃぎまくる。実の妹とはいえ、女の子の柔らかな胸を押しつけられれば、男として興奮しないわけがない。顔を火照らせて、おぼつかない足取りで歩く彼に、思わぬ事態が襲いかかる。

パコーン！

「うわっ！ な、なんだ!？」

甲高い打撃音とともに背中に鈍い痛みを感じた銀之助が、痛む部位に手を当てながら慌てて振り返ると、美しき深緑の瞳に驚くべき光景が飛び込み、背筋が凍りつく。

黒光りする高価そうなテニスラケットを手にして、右脇に眼鏡をかけたおさげ髪、後ろに小柄でボーイッシュな女子生徒を従えた長い茶髪の娘が、広い富士額に青筋を立てた鬼神の如く恐ろしい形相で自分を睨んで仁王立ちしているのだ。

「ちよつと銀之助さん！ そんなところにつっ立つて、練習の邪魔をしないでくださいませんこと？」

そう怒鳴りつけるなり、怒れるテニス娘は続けざまに強烈なサーブを打ち込んできた。傍らでアシストするおさげ娘から受け取ったボールを高々と宙に放り上げると、スラリとした長身のボディを弓なりに反らし、天にも届こうかというぐらい高々と飛び上がって右手のラケットを渾身の力を込めて振り下ろす。

跳ね上がるたびに、ゆらゆらとマシユマロのように柔らかく、熟したグレープフルーツを髣髴とさせる大きな胸が上下に波打つ。

チェック柄のミニスカートが、ムッチリと張りのある太腿はおろか、時には高価なシルクの下着に覆われた美しい桃尻さえ見えてしまうほど大きく広がるのも気にせず、次々と打ち込まれる球は砲弾の如きスピードと破壊力で、銀之助めがけて一直線に飛んでくる。

「プロも顔負けの威力と美しさを併せ持つ、芸術的なジャンピングサーブで責めてくる娘に対し、標的にされる少年はクロスした両手で顔を覆いながら抗議することしかできない。

「ひ、飛高先輩！ やめてください。危ないですよ、こんなところで……」

この横暴なテニスプレイヤーが、現学園長の孫娘にして学園の女王の異名を持つテニス部キャプテン、飛高麗香である。

「やめるですって？ この学園は我が家同然、どこで何をしようとかわたくしの勝手ですわ」  
問答無用で次々とサーブを打ち込む令嬢に恐れをなして、周りの生徒たちはただ呆然と見守ることしかできない。歯止めのかかない彼女の乱打は、徐々に被害を広げていく。

「やーん！ お兄ちゃん助けてえ」

兄に当たったボールが弾けて、すぐ傍にいた妹にも飛んできはじめたのだ。しかし、銀之助には彼女を助けることはできない。麗香はあくまで自分を狙って打ってくるので、我が身を盾にして彼女を庇おうとすれば、逆に流れ玉が当たる可能性が高くなってしまふ。

（こっ、これじゃ金枝に近づけない……）

たとえ我が身を盾にしても、救いたい愛しき妹を救えず、歯がゆい思いに打ち震える銀之助。だが、彼の心中を知ってか知らずか、助けを求める金枝に思わぬ救いの手が差し伸べる者が現れる。

「大丈夫よ、金枝ちゃん」

頬をほのかに赤く染め、怯える少女の耳元で語りかける茶髪のリボン娘。蹲り、頭を抱えて怯える親友の身体に、歩が上からスッポリと覆いかぶさるように抱きついたのだ。

弧を描く背中に沿うように己が身体を乗せて、か細い両腕で震える肩をギュッと抱きしめる小柄な少女。さらに、華奢な両足をスカートが捲れるほど蟹股に開き、太腿で金枝のお尻を挟むようにしっかりと押さえ、下腹部が尾てい骨のあたりに密着するぐらい腰を押しつけてくる。

まるで、繁殖期の雌蛙に雄蛙が抱きつくような珍妙な姿だが、重なっているのが二人の美少女となると、珍妙というよりは淫靡、扇情的といった雰囲気を醸し出していた。

(ひ、兵頭さん……)

テニスボールの乱打に抵抗しながらも、妹に抱きつく憧れの美少女の太腿を露にした悩ましげな姿に魅入られる銀之助。

「あ、歩……ちゃん、あううんっ……あんっ……」

彼女の下では、金枝が艶を帯びたはしたない声を上げながら、身を固めて耐える姿が見える。時々、お尻を挟んだ歩の太腿がワサワサと動くのがくすぐったく、そして恥ずかしいのであった。実の妹であることを忘れてしまいそうなほど、色っぽい姿だ。

(ごめん、金枝、兵頭さん……)

邪な気持ち在必死に振り払い、助けることのできない妹と愛しい少女に、心の中で詫び

る彼の耳に、悲痛な叫び声が不意に飛び込んできた。

「麗香ちゃんやめるッス！　こんなのよくないよお」

双子の兄妹をパニックに陥れる麗香の後ろに控えていた小柄な少女が、祈るように手を組み、つぶらな瞳を潤ませて必死に訴えている。

一見、細身で華奢に見える身体つきだが、よくよく見ると二の腕やミニスカートから露になっていく腿は細いながらも筋肉質で、かなり鍛えていることが窺えた。

そのうえ、ボサボサの短い黒髪や鋭角的に引き締まった顔立ち、それに控えめ、というより平らに近い胸や目立たないお尻のせいで、女子の制服を着ていなければ少年と見間違えてしまいそうな見かけのボーイッシュな娘だ。

柔道部主将、矢車香やぐるまなほ。麗香の母方の従妹にあたる彼女は、学園の女王に対して対等にものが言える数少ない生徒の一人である。

幼いころから仲のよい二人ではあったが、わがまま放題の従姉を反面教師にしてきた彼女は、少々ガサツではあるものの思いやりのある優しい娘に育ち、麗香が何かよからぬことをやらかすたびにたしなめる、いわばお目付け役を気取っていた。

しかし、女王様の暴走を止めるには力不足であり、お目付けどころか単なる従者か下僕のような扱いしかされていなかったのである。

「何言ってるんですの香！　大事な試合が近いんですよ、いくらあなたでも練習を邪魔



することは許さなくてよ」

茶色い瞳の目尻を「キッ」と吊り上げて、いつも通り口うるさい従妹を一喝すると、麗香はサッと手を出してもう一人の従者に次のボールを要求した。

「も、もうボールがありません」

おずおずとボールバッグの中身を見せる怯えた目をした娘に、女王の怒号が飛ぶ。

「だったらすぐに拾っていらつしやい！ 貴重な練習時間を無駄にするつもりですか？」  
「はっ、はいっ……ただ今……」

二人目の腰巾着少女は、慌ててあたり一面に飛び散ったボールを拾い集めに走り回る。お仕える令嬢よりはるかに大きくスイカのような丸みを帯びた巨乳が、一步踏み出すごとにユツサユツサと大きく揺れてバランスを崩し、ふらつきながらあたりを縦横無尽に駆け回る眼鏡のおさげ娘は、今にも脚が絡んで倒れてしまいそうなほど危なっかしい。

見つけた球を拾おうと前屈みになれば、大きく張り出したきれいな洋梨型のお尻が突き出され、短いスカートの中が見えてしまいそうだ。

「あ……」

背後に人の気配を感じ、振り返るとそこには銀之助がいた。不意に視線が合ってしまった、茹蟬の如く真っ赤になるぼつちやり型のおさげ娘は、急いでボールを手にとって立ち上がると、すぐさま駆け出して次のボールを探しに行く。

彼女の名前は桂木桂子<sup>かつらぎけいこ</sup>。学園と商取引があり、食堂や購買部に品物を卸している食品卸問屋「桂木商店」社長の一人娘である。学園は売り上げ全体の四割近くを占める大得意先であるが故に、学園長の孫娘たる麗香の機嫌を損なうことはできず、ただ腰巾着として彼女の理不尽な命令に従うしかないのであった。

（桂木先輩、まだ飛高先輩のいいなりに……）

二人の関係は知らないものの、彼女とは多少の面識がある銀之助は、いつもわがまま令嬢のいいなりにさせられている姿を目にしては心を痛めている。

「まったく、ボール拾いぐらいもつと早くできませんの」

五分ほどして、ようやくすべてのテニスボールを集めて戻ってきた彼女を睨みつけ、再び激しく叱ると、麗香はサッと手を突き出す。

「す、すみません、麗香お嬢様」

震える手で差し出されたボールを引つたくと、再び宙に放り上げるテニスの女王様。続けて飛び上がり、大きく振り抜いたラケットがボールの芯を捉え、ふらつく美少年めがけて弾丸のように放たれたその時だ！

ザッ!!!

二人の間に、敵陣へ斜めに鋭く切り込む角行の駒の如き勢いで、背の高い娘が、青いリボンでポニーテールに纏めた長い黒髪を靡かせながら、疾風とともに割って入った。

大きく脚を開いて踏み込むと、ミニスカートがずり上がって太腿が露になるのを気にも留めない勇ましき娘。そして、手にしたスポーツバッグの中から突き出た、新体操競技用の棍棒を、侍の太刀の如くスラリと引き抜いて片手で素早く横一文字に振り抜く。

腕を振る勢いに釣られて、瑞々しい大きなバストが制服の胸ボタンをすべて弾き飛ばしてしまいそうなほど激しく、ブルンブルンと波打つ。

パキーンッ！

時速一五〇キロ近くはあるはずのジャンピングサーブを、走り込んできて身構えもしない不安定な状態で、しかもテニスラケットよりもはるかに幅の狭い棍棒で打ち返した乱入者。世界ランク一位のプロテニスプレイヤーでもまず不可能な、驚くべき離れ技だ。

バズッ！

銀之助めがけて飛んだはずの黄色いボールが、放った麗香の額に命中する。着地した不安定な瞬間を狙われた彼女は、足を滑らせて仰向けにひっくり返った。

「あうっ、な、何てことしてくれますの！ かどわき角脇さん!!」

赤く腫れた額を手で押えながら、ヨロヨロと立ち上がり怒号を飛ばすテニス娘に、棍棒の先端をサッと差し向けて、挑発的な口調で乱入娘は言い返す。

「練習熱心なのはいいけれど、周りに気を配れないようじゃスポーツ選手として失格ね」引き締まった凛々しい顔立ちと、一六〇センチを超えるスリムなボディに大きく張り出

す胸は桂子には及ばぬものの、対峙する麗香がグレープフルーツならさしずめマスクメロンか、といったほどの立派なサイズと美しく整った丸い形を誇り、女王様を凌駕している。美しい双曲線を描いて括れたウエストに、大きめながらも程よく引き締まった張りのあるヒップ。長く伸びたカモシカのような両足は、太腿も脹脛も太すぎず細すぎず中間的なサイズを保ち、美しさだけでなく見るからに俊敏そうなシルエットを形作っていた。

この学園の生徒の中で女王に刃向かう唯一の存在、新体操部キャプテンの角脇七華だ。

周りを顧みず、学内で好き勝手に放題の麗香と、ことあるごとにわがまま令嬢を戒め、対立する彼女の二人は、下級生たちからの人気を二分するいわば二大「憧れのお姉様」なのである。麗香は男子生徒から、七華は女子生徒からの人気が特に高い。

「七華お姉様、今日も素敵っ！ そこいらの男じゃ敵いませんわ」

斜に構えたクールな彼女に、周囲の妹になりたい乙女たちの視線は釘づけだ。

「何を言ってますの、気を配るべきはわたくしではなくて、周りの者たちですわ」  
突如現れた宿敵を、鋭く睨みつけて身勝手な自論で言い返す麗香。

「麗香先輩、いいなあ」

「あの高飛車な物言いがたまらないぜ」

女王様のお言葉に身を震わせて、弟分、というより下僕になりたい下級生の男子たちが、背筋をゾクゾクと震わせ、顔を赤らめて感激する。



周囲の喧騒をよそに、睨み合う二人の目と目の間で見えない火花が激しく飛び散るのを、ただ一人、銀之助だけが感じ取っていた。

(七華先輩……また飛高先輩と……)

その時……。

キーンコーンコーンコーン！

創立以来生徒たちを見守っている古びた鐘が鳴る。

「……チッ！」

ふてぶてしく舌打ちすると、麗香はボールを当てられたショックで落としたラケットを拾い上げ、スタスタと校舎へ向けて歩き出す。一触即発の事態は予鈴によって回避された。いかに学園長の孫であろうとも、授業をサボるわけにはいかないのだ。

「待って！ 彼に謝りなよお」

「お嬢様あつ!!」

パタパタとあとに続く二人の下僕を連れて足早に校舎へ向かう宿敵を見送ると、七華も自分の教室がある金将型の校舎へスタスタと歩いていく。見物人たちも続々と校舎に向かつていく中で、ただ一人銀之助は七華に近づいていった。

「あ、あり……」

「あのお嬢が好き勝手やってるのが気に入らないだけ、ただ、それだけよ」

ふらつきながら礼を言おうとする彼を、少し苛立ったような強い口調の言葉で遮るポニ  
ーテールの娘は、助けた少年に目を向けることすらなくその場を足早に去る。

「そんな……」

心の中に、鉛色の雲が立ち込めるようななどんよりとした感情が沸き立ち、思わず呟く銀  
之助は、ただ呆然と彼女を見送ることしかできなかった。

（昔はあんなに親しかったのに、どうしてこうなっちゃったんだろう）

七華は昔から家が近いこともあって、坂田兄妹にとって姉のような幼馴染である。特に  
銀之助にとっては、女の子のような顔立ちのせいでよくいじめられていた自分のことを、  
身体を張って助けてくれた頼れる姉貴分であった。

かつての彼女は、ただのお助け姉貴ではない。いつも助けてくれたあとで「あんな奴ら  
に負けるな、強くなれ」と、叱咤激励していたのだ。

だが、今の彼女はまるで違う。いつも麗香にいいようにいじめられていても、相手が女  
であるが故にやり返せない心優しい彼を助けてはいるのだが、その後の態度はそっけない、  
というよりは避けているような感じなのである。

（もう、元には戻れないの？ 先輩……）

ある日の出来事をきっかけに、二人の関係がどこかズレてしまったことに気づけぬ彼の  
心中は、彼女のことを思うといつも穏やかではなかった。

仰向けになったままのブルマー美少年の上に、同じくブルマー穿きの美少女が覆いかぶさる。男女がお互いの股間を相手の顔に向ける、いわゆるシックスナインの姿勢だ。

「ふふっ、すっごい元氣ね」

真っ赤に膨らんだ亀頭の先端を人差し指でツンツンと突きながら、歩はケラケラと笑う。普段の大人びた表情とは違う、小悪魔じみた笑顔で。

「あうっ、だ、だめだよ……そんなことしちゃ……」

「妹のブルマー穿いてハアハアしちゃってる悪い子に、そんなこと言われたくないなあ」  
そう言われた直後、銀之助の股間を奇妙な感覚が襲う。

「はあうっ！」

まるで一物に、生きたナマコか何かを押しつけられたような、何か粘ついたものが絡みついてくるような不思議な触感。歩が、カチカチにいきり立った肉棒に、舌を這わせはじめたのであった。

ピチュ、ペチャペチャペチャ……。

淫音を奏でながら、熱き男の筋肉を舐め回す少女の舌は、先端をマッサージ機のように微かに震わせながら、根元から先割れまで、往復するように淫らなマッサージを続けている。

時折、小さな両手を陰囊に回して、まるで皺の数を数えつつ、周りを覆う繁みを指にパ



スタの如く絡めるように白魚のような細い指を這わせる歩。彼女の手の平の動きは、まるで地を這うタランチュラの動きの如く妖しげでいて美しく、淫靡さに満ちていた。

男のツボを押さえている彼女の奉仕は、瞬く間にいきり立つ美少年を肉欲の渦へ引きずり込んでいく。

「だめ、出ちゃうよ……兵頭さん……」

喉を反らして喘ぐ銀之助に、いつもの大人っぽい口調で奉仕のブルマー少女は答える。

「くすつ、まだまだ早いわ。それに金枝ちゃんのブルマーを汚しちゃうつもりなの？ 酷

いお兄ちゃんね。へ・ん・た・いっ！」

そう言つて彼女は、燃え滾る一物の根元を指先でギュッと摘む。

「あうっ！」

股間を直撃する鋭い衝撃。強制的な寸止めに驚き、銀之助は電気ショックで蘇生されたかのように全身をビクンと波打たせる。反動で飛び上がった一物の先端が、歩の口元にペチンと当たった。

「もうっ、催促なんかしちゃつて、せつかちねえ」

「催促つて、ええええっ！」

疑問をぶつける間もなく、腹上の美少女はさらに驚くべき行為を純情少年に行う。いきり立った一物を、小さな口で頬張りはじめたのだ。

「んっ、んっ、んんんっ……はふうっ……」

真珠のような光沢を帯びた薄い桃色の唇を開いて、喉の奥まで押し込む。そして小さな頭を、長い髪を振り乱しながら上下に激しく揺り動かして、柔らかい唇を器用に動かして硬くいきり立った肉棒を揉み扱う。

クチュッ！ パチュパチュピチュッ……。

狭い口腔の中では、短く柔らかい桃色の舌がナメクジのように蠢いて、頬の内側を蹂躪する肉棒に粘液を塗りつけながら、ぬめぬめと絡んできた。

「あうっ、そ、そんなところ……うあうっ……」

少女の慣れた舌使いは、口に含んだ男根の持ち主すら気づいていない急所を的確に責め立てて、射精を促していく。先割れ、裏筋、エラの下……表面どころか、皮膚の下を走る神経まで直に舐められているかのように強烈な刺激がビシビシと走り、頭の中に白い火花が無数にスパークしていく。

さらに彼の目の前では、ブルマーの色ともあいまって二つ並んだオレンジのように見える小振りな、それでいて柔らかそうな丸く可愛らしいヒップが、まるで誘うように激しく上下に揺れている。時折鼻先を擦る橙色の薄布は少女の汗と蜜で湿り、甘く酸っぱい香りを醸し出していた。

股間のあたりがジットリと湿って、微妙にオレンジ色が濃くなっているのがわかる。

「ひ、兵頭さん、ぼ、僕……もう持たないよ、兵頭さんつつつつ……ああ……」

熱に浮かされたかのように、愛しい少女の名を呼び続けるベッドに横たわった美少年はち切れんばかりに膨らんだ彼のペニス、機関銃の連射の如き速さで脈打ち、根元から先端に向けて、衝撃が一気に駆け抜けていく。発射の時がついに訪れた。

「もう限界ね、いいわ、出させてあ・げ・る」

唇で一物の変化を感じ取った歩が、最後の一押しとばかりに大きく開いた先割れの中に、舌先を細く尖らせて軽く挿入したその瞬間だ。

「ひいっ！ あっ、あああーつつつつっ！」

ドクッ！ ドクッドクッドクッツツツツツ！！

声にならない叫びとともに、銀之助は憧れの女の子の口の中で達してしまった。

すでに一度射精しているにもかかわらず、次々と溢れ出る精液を歩はジュルジュルと音を立てて一滴残らず啜り尽くし、さらにエラの裏に溜まったわずかな残りまで舌を絡めて、きれいに舐め尽くす。

「ふうー」

キラキラと光る粘液の糸を引きながら口から男根を引き抜くと、歩は腰の上で頬杖をつきながら何か可愛らしい小動物でも愛でるよううなうつとりとした目つきで、いまだ衰えぬそれを眺めて小指で軽く突いてみせる。



「まだ物足りないの？ 欲張りさん。でも……」

歩は、銀之助の腰を跨いでベッドの上に立ち、下で戸惑う彼の顔をじっと見つめる。

「今度はわたしを気持ちよくする番よ、銀之助君」

そう言つて歩はブルマーの股布を左手で掴み、下着と一緒に左脇へずらした。

「あっ……」

年頃の男の子なら、一度は思い描くであろう憧れの異性の秘所。その本物を思わぬ形で目の当たりにしてしまい、ゴクリと唾を飲み込む銀之助。

髪と同じ色の、薄茶色をした幼顔には不釣り合いな濃い繁みに覆われた秘密の花園は、ゆっくりと開閉を繰り返しながら、糸を引く甘い蜜を股間の下でいまだいきり立ったままの赤い肉棒の上に垂らしている。

すぐに届くほどの間近で、彼の来訪を待ち構えているのだ。

（兵頭さんが……こんなに日な女の子だったなんて……）

憧れの女性に思い描いていたイメージが、音を立てて崩れていく、そんな気がしながらも彼女が次々と繰り出す官能的な技が作り出していく世界へ、銀之助は徐々に呑み込まれていく。

いつも真面目で、子供っぽい見た目に似合わないほど大人びた考え方と喋り方で、クラスを纏める絵に描いたような優等生。しかし、日なことが大好きな両刀使いという普段か

らは想像もつかないもう一つの顔を持つ少女、兵頭歩。

まるで、初めは一步一步前進することしかできないが、敵陣に突入した途端に裏返り、動ける範囲が大幅に増える歩兵の駒のような二面性を持つ娘であった。

「もうっ、じれったいわねえ」

あまりの衝撃に身動きが取れなくなったブルマーの美少年に業を煮やしたりボン少女は、みずから腰を屈めて、いきり立つ彼の肉槍の先端を、右手の親指と中指で大きく広げた己が幼腔の入り口にあてがった。

「んんっ……」

気合を入れて、ベッドのスプリングをギシギシと軋ませながら腰を沈めようとしたその時だ！

「ちよつとまったああああーっ！」

絶叫とともに引き戸がガラリと音を立てて開き、鉄砲玉の如き勢いで小柄な少女が飛び込んできた。怪力柔道娘、矢車香だ。ようやく二人を捜し当てた彼女は、廊下から事の成り行きを見ていたのである

「そーんーなーこーとーはー、ゆるさーんっ！」

叫びながら情欲に耽る二人めがけて、バタバタと足音を立てて一気に駆け寄る暴走娘。振動で薬品棚から、薬瓶がいくつも床に落ちてガシャガシャと音を立てて碎け散る。

「えっ！ な、何？」

突然の乱入者に驚き、怯える茶髪娘の胸倉をムンズと掴むと、強引に銀之助から引き剥がした。

「きゃあっ！」

バーン！

背中からベッドに叩きつけられた少女の軽い肉体が、スプリングをギシギシと軋ませながら何度も宙に舞う。やがて反動が収まるころにはすっかり消耗しきって気絶していた。

「ひ、兵頭……さん？」

いったい何が起こったのかわからず、啞然とする銀之助に満面の笑顔を浮かべた香が近づき、額を優しく撫でて話しかける。

「男の子には優しくしてあげなきゃだめッス。ねっ、銀之助君」

そう言つて、自分より背の高い少年をいわゆるお姫様だっこで軽々と抱え上げてウインクすると廊下に飛び出し、行人人の間を縫うようにペタペタと駆ける。

「ちよっ、ど、どこへ連れていく気ですかーっ!？」

慌ててブルマーをたくし上げながら、怪力娘に向かって叫ぶか弱き美少年。

この時すでに、妹を助けるためにやむなく受けたはずの辱めの鹵車が、徐々に狂いはじめていた。

「苦しいのね、出したいのね、ならばわたくしに奉仕しなさい。そうすれば出させてあげますわ」

もがき苦しむペット候補の美少年の反応に、興奮気味の麗香はさらに自分への性的奉仕を要求してくるが、彼女は大きな勘違いをしていた。銀之助にとつての「苦しいこと」とは、自分自身のことではなく、桂子の身を案じる苦しさなのだ。

「な、なんで、なんで……こんなことするんです、飛高先輩。ぼ、僕のが嫌いで、いじめたいだけなら、先輩を……桂木先輩を巻き込む必要なんか、ないじゃないですかあ！」

己が股間を押しつけている美少年の口から出た悲痛な叫びが、麗香の秘唇をブルブルと震るさせた。産道を経て子宮の奥底まで、痺れるような刺激が駆け抜けていく。

「あんっ、き、嫌いですってえ!? あなたみたいな可愛い子、嫌いなわけではないでしょう。なぜわかってくれないの! こんなに、こんなにしてあげているのにいいいいーっ!!!」

数々の好意的行動を非道と思われていたことに困惑する女王様は、いつにない可愛らしい口調で胸の内を語りつつ、なおも奉仕を要求してくる。

(えっ!?)

いつも、人を見下している態度ばかり取っている彼女の口を衝いて出た思わぬ一言に、戸惑う銀之助。



(飛高先輩が僕を? そんな、まさか、そんなことあるわけ、ない……)

好きな子ほど意地悪したくなる屈折した思いは、虐げられし純情少年には理解しがたいものであった。しかし、咽びつつ上げられた彼女の悲痛な叫びには、嘘が混じっているとも思えない。

「し、信じませんよ……そんな言葉……」

たどたどしくも、怒りに満ちた口調で言い放つ銀之助。彼の言葉と吐き出された熱い吐息が、薄布一枚を隔てた乙女の丘を低周波マッサージ機でも押しつけたかのようにビリビリと痺れさせる。

「あんっ!」

思わぬ反撃にたじろぎ、艶やかな短い悲鳴を上げてしまう麗香。しかし、これで怯むほど、わがまま令嬢はヤワじゃない。

「とっ、とにかく……あつ、アナタが私を満足させない限り、この娘が離れることはありませぬわ! ほら、はやくしなさいよお、ほらほらほらあつ……」

股間に押しつけられた口から放たれる叫びに感じ、興奮しながらも必死に威厳を保つような口調で命令する女王様。膝を使って、軽く銀之助の柔らかな頬をペチペチと叩きながら、己が股間への奉仕を、欲しいものを親にねだるダダッ子のような甘えた口調で要求してくる。

確かにこのままではいつまで経っても、桂子は己が巨乳を押さえつけ、無理矢理首を曲げた姿勢で苦しみ続けるだけだということは、銀之助にもわかっている。わがまま令嬢の命令を聞き入れるしか、彼女を救う手立てはなかった。

たとえそれがまたしても、女性の前で射精するという恥を晒すことになるとしても。

「くっ……」

悔しそうに口元を歪めると、彼はおぞおぞと舌を出した。そしてただたどしい動きで、白くキラキラと輝くシルクの股布に浮き出した窪みに沿って先端をチョロチョロと、まるで小刻みに入れ入れされる蛇の舌先のように這わせていく。

気の抜けたような舌使いに、女王様の怒りが爆発する。

「やっ、やっと素直になりましたわね。でもそんな程度で済むと思ってますの？ 甘いですわ。もつと真剣にやりなさいっ！」

股間をギュウギュウと押しつけて、さらなる奉仕を強要すると、麗香は上半身を後ろへ捻って彼の下腹部に手を伸ばし、薄い繁みに包まれた一物の根元付近をギュッと軽く抓った。

「ひゃあうっ！」

奇襲攻撃に焦り、背中を弓なりにビクンと反らして叫ぶ半裸の大的字少年。

不本意だが、女王のご機嫌を取って桂子を苦痛から解放させようと、必死に舌での奉仕

をはじめた。粘液を帯びた桃色の舌がのたうつように這い回るたびに、水気を帯びたくもりガラスのように麗香の下着が透けていく。

クンニリングスの経験などもちろんない彼の舌は、慣れたペット少年たちと違いたどたどしいが、逆にそれが新鮮な刺激となって、跨る女王様を激しく燃え上がらせていく。

「そ、そう、でもまだまだだね、もつと、もつと気合を入れてやりなさいっ」

いつしか、はしたないほど大きな声で喘ぎながら、尻に敷いた美少年の顔の上を滑らせるように腰を振り始める麗香。舌や唇だけではなく、彼の低い鼻先にもクレヴァスを擦りつけて、秘裂の内側をも軽くくすぐっていった。

やがて秘唇の内側より恥蜜が溢れ出しはじめ股布から染み出して仰向けになった美少年の顔に容赦なく塗り広げられていった。

「ぬうつ、はっあぶうつ！」

甘酸っぱい危険な蜜が顔はおろか鼻の中にまで流れ込み、文字通り麗香に溺れそうになる銀之助。だが彼に、ラヴ・ジュースとは違うものまでが塗りつけられる危険が迫ってくる。

「はあっ……」

麗香の股間から尿道を経て、膀胱までじんわりと痺れるような感覚が、電気ショックのように何本も走っていく。あまりの気持ちよさに、尿意をもよおしてしまったのだ。

いくら美少年をいたぶるのが好きな彼女とはいえ、顔面に向かって失禁などというはしたないマネができるはずがない。ましてや、相手がみずから「王将級の極上」と評価する銀之助ならなおさらであった。股の間にギュッと力を入れて、女王様は必死に尿意をこらえる。

ムッチリとした太腿が閉じられて、強制奉仕させられる美少年の柔らかな頬を付け根のあたりがキュッと締めつけた。

「ふうっ、はぶっ、んくっ、んっんっんっ……」

いきなり顔を押しさえつけられた銀之助は、もっとしっかり舐めるように要求してきた合図だと誤解して、慌てて舌の動きを速めていく。

ペシャ、プチャ、プチュプチュプチュッ！

たっぷりと唾液を絡めたザラついた柔肉が、ガラスのように透けた下着の上に押しつけられ這い回り、下腹部に指圧のようなジワジワとした刺激を与えていった。

さらに、シルクの布地が吸いきれない己が唾液を、内なる泉から溢れ出る淫蜜とともにジュルジュルと卑猥な音を立てながら啜るようにブルブルと震える。

「あんっ、そ、そんなに強く、吸うなんて……ふうああああんっつつつつ」

日頃使い慣れている下僕たちの足への奉仕よりも、はるかに大胆になってしまった舌や

唇の奉仕に、ますます興奮していく顔面上の高飛車令嬢。股間から魂まで吸い出されそんなほど強力なバキュームに、全身をゾクゾク震わせながら悶え喘ぐ。

「はううつ、な、なんて大胆な子なの、そんなところまで……いあんっ」

目を閉じて縦横無尽に這わせる彼の舌は動きが定まらず、股布の上だけではなく切れ上がった小股のフリルの下に潜り込み、太腿の付け根や股間を覆う痴毛にまで達してしまう。粘液に覆われた蠢く軟体で敏感な肌を触れられると、そこから下腹部全体の毛が逆立つ静電気のような刺激がピリピリと広がり、全身を覆っていく。身体の表面を覆う刺激と中から広がっていく尿意のジワジワとした刺激が渾然一体となつて、彼女の興奮は天井知らずに高まつていく。

「んぐっ、んんっ、んんんんっ……」

「あ、あなた、凄い、凄いですわ。な、ならば、と、特別よおっ！」

喘ぎながら麗香はスカートの中に右手を入ると、シルクの股布を摘んでスルリと横へずらす。今までに、どのペット少年にも触れさせるどころか拝むことすら許されることになかった女王様の秘所が、直に銀之助の顔に押しつけられた。

「ぎ、銀之助えっ、も、もつともつと、お舐めなさいあつ！」

痴態を演じ、恍惚としていく女王様。感極まった彼女は、今度は左手でユニフォームをたくし上げて、大きな両胸を曝け出す。股間に押さえつけた少年の顔の上で跳ねるたびに、

上下にプルプルと大きく揺れ動く双乳が、高価なシルクのブラのフロントホックを弾き飛ばした。

「んふっ、あっああっ、」

飛び出した白き乳房を揺らしながら、硬く勃起した桜色の乳首を指先で摘んで捻り、爪をキュッと立てる麗香。股間だけでなく、胸からも広がるジンジンと痺れるような快感が、ますます彼女を酔わせていく。

「いっ、いっ、いいのおっ！ もっと、もっとわたくしを愛して……愛しなさいっ！ きゃあうっ!!」

みずから股間を押しつけるように、腰を激しくグラインドさせながら命令を下す、発情の女王様。あまりの激しい動きに、ずらした下着がギリギリと引き絞られて、まるで禪の如く股間やお尻の谷間にきつく食い込んでいく。

「はあんっ、お、お豆が……つぶれちゃううううっ！ や、やあんっ!!」

食い込みが深くなるにつれて、奇妙な悲鳴を上げはじめの淫欲のお嬢様。興奮し、肥大化して表に飛び出しそうなクリトリスが、股布で固く押さえつけられてしまっているのだ。

逆に、高級シルクの禪に押し出されるようにはみ出してきた紅色の花弁が、白いスコートのなかで熱く淫らな花蜜にまみれながら、ヒラヒラと妖しく舞い踊り、美少年の柔肌に擦りつけられるたびに、静電気のような刺激がパチパチと走る。

ほとんど丸出し状態でユサユサと揺れるヒップでも、食い込んだ尻布で擦られる菊座が摩擦で発火しそうなほど熱くなり、ヒクヒクとはしたなく痙攣していた。まるで、こちらにも何かを欲しているかのように……。

(ううっ、こ、こんなに……)

鉄砲水の如く次々と溢れ出る恥蜜と、クレヴァスに食い込んだ鼻がもげそうなほど激しい腰の動きで、跨がれて性の下僕扱いされる美少年にも彼女が興奮しているのがはっきりとわかる。

さらに、はみ出した「具」で顔面を撫で回されてはたまらない。不本意な奉仕をさせられつつも、興奮を抑えていた一物のブレーキが利かなくなってくるのだ。彼女の興奮に引きずられるように、銀之助の男根もビクンビクンと痙攣していく。

かろうじて留まっていた理性という名の堤防が、愛液の洪水で決壊していくように……。「あんっ、す、すごいわあ、あなた。初めてでここまで燃えさせてくれるなんて。もっともっと激しく、激しくしなさいっ!! 銀之助ええええーっ!」

前髪を上げながら大きく後ろへ反り返り、艶っぽくはしたない叫び声を上げる麗香。ついに、彼女のギリギリのところ留まっていた最後のプライドが、膨らみすぎたゴム風船の如く弾け飛んだ。

股間を弄る美少年の舌がもたらす快感に、下半身をブルブルと震わせて絶頂の時を迎え







この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※主人公の尻は、美満の方に入ってます。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!